

# 暗殺

## 独立運動

春日信彦

## 自殺説

6月14日（水）、ここ数日間、今にも自殺しそうなほどに落ち込んだ沢富のことが心配になった伊達は、悩みを聞き出すために自宅マンションに呼びつけた。午後7時過ぎに伊達のマンションにやってきた沢富は、キッチンテーブルの椅子にドスンとお尻を落とすなり大きなため息をついた。そして、伊達とナオ子の目の前で苦渋の表情を見せると頭を抱えてガクンと頭（こうべ）を垂れた。沢富は、自分の悩みを夫妻に打ち明けようと清水の舞台から飛び降りる思いでやってきたものの、いざとなると怖気づいて、踏ん切りがつかなかった。

沢富の悩みの原因は、5日前に陣内署長に耳打ちされた言葉にあった。その言葉というのは、6月2日（金）に起きたナカス女学院高校2年生の転落事故死にかかわるものであった。その転落事故死というのは、高等部西棟5階にある放送室の西側窓からの女子高生転落死であった。調査の結果、学校側に設備上の過失はなく、室内で誰かと争った様子もなかった。また、その転落の様子を目撃した者もいなかった。以上のことから、上記転落死は、思春期におけるうつ病が原因の投身自殺ということで処理された。

ところが、6月9日（金）の夕刻、中洲署に“ミオンは殺された”というナカス女学院のJKらしき少女からのタレコミがあった。署は、いたずら電話に過ぎないと判断したが、新聞社にも電話している可能性があるかと判断した署長は、マスコミ対策のことを考えて、形式的な再調査をすることにした。口が堅くイヌのように従順な刑事はいないかと思い浮かべたとき、彼の脳裏にボケの入った沢富刑事の顔がポカンと浮かび上がった。

早速、署長室に呼びつけられた沢富は、即座に極秘の単独再調査を行うように指示された。その時、眉間に皺を寄せた署長は、なにか納得がいかないような表情でボケッと突っ立っている沢富の横に立つと唇を耳元に近づけ、小さな声で耳打ちをした。“再調査はあくまでも形式だからな、極秘でやるんだ、いいな”と一言付け加えた。そして、署長は、ニヤッと笑顔を作り、即座に、不満そうな表情の沢富を威圧するようにグイッと睨み付けた。

すでにうつ病による自殺と処理されたこの事件には、まったく殺害の事件性が浮かび上がらなかった。学校でのイジメや友達や家庭でのトラブルも見受けられなかった。ただ、自殺事件後、なぜか、自殺でなく殺されたという噂が流れていた。その噂を頼りに捜査を開始できないこともないと沢富は考えたが、署長の一言が脳裏に浮かぶと怖気づいて一步が踏み出せなかった。

ナカス女学院には、日本で最も難関と言われている倍率約100倍の皇室コースというのがあり、このコースに在籍している生徒は、ほとんどが財閥系で、当コースの彼女もM財閥の息女だった。名称から推測されるように、皇室コースの特典は、皇族との婚姻のサポートを学校及び政府が行うというものだった。当然、定員10名の皇室コースに入学するには、面接試験、筆記試験、身体検査の合格以外に、両親の経済力、社会的地位も査定された。さらに、在籍し続けるには、年額1000万円の寄付金と皇室コースに設けられた厳格な規則を遵守する義務があった。

投身自殺事件後、涙しながらの小松校長の記者会見では、皇室コースの厳しい規則に耐えきれず自殺したのではないかとの見解が出されたが、彼女は放送部部長を務める天真爛漫で聡明なJKであったことを考えると、沢富には合点がいかなかった。署長の指示通り、思春期のうつ病自殺として片づけてしまうことはたやすい事だと考えたが、うわべだけの調査で穏便に事件を処理していいものか悩んでいた。

## 暗殺説

母親の話では、一人で悩むような内気な性格ではなく、2年生に進級してから、自殺をにおわせるようなそぶりは一切なかったとのことだった。また、4月に入ってF大生中島とのメールのやり取りをするようになってからは、以前より一層明るくなったとのことだった。母親の言っていることが事実であれば、彼女が投身自殺するとは到底考えられなかった。また、彼女の家系は、神武天皇の子孫にあたり、皇室との婚姻は約束されていたようなもので、将来を悲観してうつ病になるというようなことは全く考えられなかった。

沢富は、彼女が殺害されたと仮定して、誰が、どんな理由で殺害したのかを考えてみた。推理の材料となるものは何一つなかったが、なぜか、彼女が女帝になれる家系にある事が、殺害事件の引き金になったのではないかと思えた。というのは、九州の学生たちは、女性を天皇とする“九州帝国” 建立に向けた独立運動を各地で行っていたが、一方、王政復古運動を活発に行う九州の学生たちを煙たがっている政府は、テロ防止対策と称して、大学と高校に対し、学生運動禁止の指示を出し始めていたからだ。

大学側からの学生運動への弾圧が強まるにしたがって、九州学生連合共闘を立ち上げた九州各地の大学生たちは、軍国主義日本政府に対し、九州独立運動を一層活発化させていた。メル友であるF大学生中島が、九学連の書記長を務めていたことを考えれば、彼女が独立運動に賛同していたと考えてもおかしくはなかった。彼女が九学連にかかわっていたのであれば、独立運動弾圧のために殺害されたと考えても、あながち見当外れではないように思えた。

沢富はさらに憶測を続けてみた。かわいい彼女は、学生の間ではアイドル的存在だった。twitterでは、彼女のフォロワーは数十万に上っていた。そのことから、彼女が九学連にかかわっていたこと知りうる人物は、学生以外に多数いたと考えられる。おそらく、政治家、校長、教職員たちも知っていたに違いない。殺害動機を持つ人物となれば、学生運動を煙たがっている政府ということになるが、完全犯罪として彼女を殺害するには、バットン真理教の神父でもある校長を実行犯として利用したと考えられた。

政府の指示に従った校長が殺し屋を雇って暗殺を実行したと考えると、つじつまがあってくる。当然、事件後、指示に従った校長を政府が保護することは容易に推測される。きっと、陣内署長は、校長を保護するように警察庁から何らかの指示を受けているに違いない。そう考えれば、署長の一言にも合点がいく。しかし、これは、単なる憶測でしかない。なんの証拠もない。もし、目撃者を探し出すために、生徒たちからの聞き込みを始めたならば、きっと、捜査から外されるに違いない。

おそらく、例のタレコミのJKは、マジの目撃者なのかもしれない。もし、目撃した彼女の素性が公開されれば、彼女も暗殺されてしまう可能性が出てくる。うかつに、聞き込みもできない。やはり、署長の言いなりになって、見ザル、聞かザル、言わザル、に徹すべきか？これじゃ、警察は、政府のイヌ同然の手下ということになる。これでいいのか？沢富は、JK暗殺説を誰かに打ち明けたい気持ちでいっぱいだった。だが、署長の耳打ちを思い出すと暗殺説を口にできなかった。

沢富は、伊達夫妻を前にして、数日間考え続けてきた自分の暗殺説を話すべきか悩んでいた。伊達は、ひとこともしゃべらない沢富に声をかけた。「おい、どうしたんだ。困ったことがあれば、話せばいい。水臭いぞ。おい、どうした？」ナオ子もこれほどに苦渋に満ちた表情の沢富を見たのは、初めてであった。「サワちゃん、一人で悩んでなくて、何でも言ってちょうだい。頼りない夫婦だけど、力になりたいのよ。そんなに苦しんでいるサワちゃんを見てたら、私たちも、やるせないのよ。サワちゃん、元気を出して。ひろ子さんと喧嘩でもしたの？」

しばらく沢富の沈黙は続いた。沢富の心は複雑に揺れ動いていた。万が一、暗殺説が当たっていたとすれば、彼女は不運な犠牲者ということになる。独立運動弾圧強化のために、何の罪もない少女が、見せしめとして殺されたことになる。きっと、彼女がジャンヌダルク的存在になるのを恐れた国家は、最も疑われることのないバツテン真理教の神父でもある校長を使って暗殺を実行したに違いないと思えた。

沢富の暗殺説は何の根拠もない妄想に過ぎなかったが、聞き込みいかんでは妄想でなく現実のものとなりうる可能性は十分残されていた。警察の自殺説に従って、疑うこともせず、何もしなければ、一人の女子高生がウツに陥って投身自殺したという小さな事件で終わってしまうが、刑事たるものが、殺害の可能性を無視して、何もせず、黙って傍観していいものか？沢富は悩み続けた。

警察というものは、ほんの少しでも疑う余地があれば、徹底的に捜査すべきではないか？権力者を護衛する従順なイヌであっていいのか？自分の保身のことばかりを考えているのではないか？権力者の飼いイヌであっていいのか？死の真実を解明せず知らぬふりをしていいのか？署長を恐れているのではないのか？刑事をクビになるのを恐れているのではないのか？左遷されるのを恐れているのではないのか？沢富は、自分の心に何度も問いかけていた。

## 告白

沢富の頭がふいに持ち上がった。そして、口がひとりで動き始めた。「先輩、僕の話聞いてくれますか？」伊達は、即座に返事した。「なんだ。早くいってみろ。話せば、スッキリする。さあ」ナオ子も、身を乗り出して言葉を添えた。「サワちゃん、どんな悩みでも言ってちょうだい。できる限りのことはするから。勇気を出して」沢富は、しばらく黙っていたが、夢遊病者がしゃべるかのようにゆっくり口を動かした。

「もし、僕の話聞いたならば、ご夫妻は死を覚悟しなければなりません。それでもいいですか？」夫妻は、沢富の言っている意味がつかめず、見つめ合って、首をかしげた。伊達が、恐る恐る問い返した。「いったいどういうことだ。死を覚悟しなければならないって？」沢富は、話すのをやめようと思ったが、もはや口はひとりで動き始めていた。「とにかく、死を覚悟できるとおっしゃっていただければ、話をします。でも、イヤだと言われれば、僕一人で死にます」

自殺の決意だと思った夫妻は、顔面蒼白になって見つめ合った。夫妻の手は、震えだしていた。伊達は、どうにかして自殺を止めさせねばと勇気づける言葉を探した。だが、頭は真っ白になり、脚まで震えだしていた。突然、伊達の口から甲高い声が飛び出した。「チョチョチョッと待て。自殺はいかん。お前は警察官だ。人の命を救うのが使命だ。分かっているだろ。とにかく、話を聞く。自殺はいかん」

沢富は、亡霊のような暗い表情でニコッと笑顔を作り、問いかけた。「それじゃ、一緒に死んでくれるんですね。そこまで僕のことを思っていてくださるとは、マジ幸せです。それでは、話します」ナオ子が突然跳びあがった。「死にたくないわよ。サワちゃん、頭がおかしくなったの。気は確か？いやよ、死にたくないわ。もう、こんな話はやめて。サワちゃん、自殺してどうなるというの。あなたも男でしょ。どんなに苦しくても、生きるのよ。とにかく、できる限り、協力するから、死ぬなんて言わないで」

血の気の引いた沢富の顔は、ほんの少しゆがんだ。死神に取りつかれたような沢富は、つぶやき始めた。「奥さん、自殺はしません。闘って、死ぬのです。僕は殺される運命にあるのです。もう、この話はよしましょう。ご夫妻とは、関係ない話です。僕は、一人で闘って、黙って殺されます。それでいいのです。変な話をして、申し訳ありませんでした」夫妻の頭は、ますます混乱し始めていた。

闘って殺される、と聞いたからには、ますます、相棒としてこのまま沢富を返すわけにはいかなかった。誰かと決闘でもするのかと思ったが、ちょっとこれはないと思えた。「殺されるって、誰かの恨みでも買ったのか？相手は、ヤクザか？」伊達は、ナオ子に振り向くと首をかしげた。ナオ子も殺されると聞いて、ますます心配になった。沢富が殺されては、夫の出世はなくなると思ったナオ子は、夫とともに殉死する覚悟を決めた。

ナオ子は、大きく深呼吸し、沢富の死んだ魚のような眼を見つめて話し始めた。「分かったわ。サワちゃんだけを死なすわけにはいかないわ。死ぬときは、3人一緒よ。ねえ、あなた」伊達は、ナオ子も思い切ったことをいうものだと思嘆したが、さすが刑事の妻だと誇りに思った。沢富が誰と闘うのか皆目見当がつかなかったが、伊達も沢富とともに闘う決意を固めた。

「よし、俺も、男だ。一緒に闘おうじゃないか。いったい、誰と闘うんだ？」気の毒に思え始めた沢富は、もう一度念を押した。「本当に、一緒に、闘ってくださるのですね。暗殺されるかもしれないんですよ。マジ、ヤバイんですよ。本当に、暗殺されても、いいんですよね？冗談じゃないんです」夫妻は、マジな眼差しで話す沢富の強い口調に身を引いた。伊達は、なんとなく心細くなったが、ここまで啖呵（たんか）を切った手前、後には引けなくなった。

伊達は、ナオ子に振り向き目をつり上げうなずいた。ナオ子も右手にこぶしを作っとうなずいた。眉間に皺を寄せた沢富に振り向いた伊達は、大きくうなずき返事した。「死ぬときは、一緒だ。サワだけを死なすような薄情ものじゃないさ。見くびっちゃ困る。闘ってやろうじゃないか。ヤクザが怖くて、刑事が務まるか？」夫妻の決意を確認した沢富は、頭を下げて感謝した。そして、死を覚悟してくれた夫妻への恩返しを考えた。

「ご夫妻、本当にうれしいです。でも、マジ、ヤバイんです。このことは、決して話すまいと思っていましたが、ご夫妻にだけはお話します。でも、ご夫妻を巻き添えにするわけにはいきません。お話は致しますが、捜査は私一人で行います。万が一、僕の身に何かあったならば、親父に正義を貫くために殉死したと伝えてください。それと、ご夫妻のお気持ちに対するお礼として、必ず、先輩が署長になれるよう図らいます。それでは、話を始めます」

伊達は、いったん話を聞いて自分だけが傍観するような卑怯な真似はしたくなかった。死を覚悟したからには、マフィアと闘うことになったとしても、沢富と一緒に闘い抜きたいと思った。「おい、今、一緒に闘うと言ったはずだ。俺たちのことは気にするな。どんな奴らであろうが、闘い抜いてやる。話を聞こうじゃないか」夫妻は、もう一度見つめ合い、大きく頷いた。

沢富は、握り拳を両手に作り話し始めた。「先輩、話というのは、6月2日のJK転落事故の件です。すでに、この事故は投身自殺として処理されていますが、僕には、どうしても、自殺とは思えないのです。そこで、署長にばれないように密かに聞き込み調査をやろうと思っています。あくまでも、憶測にすぎませんが、彼女は暗殺されたと思っています。先輩には、僕の行動を大目に見ていてほしいのです。お願いします」

伊達は、そんな話だったのかと言わんばかりのホッとした表情で答えた。「おい、JK転落事故の件は、これ以上調査しても無駄だ。あれは、間違いなく自殺だ。恨みをかうようなJKじゃなかったし、殺害だったと仮定しても、いったい誰がやったというんだ、財閥のご令嬢を殺害して誰が得をするというんだ？サワ、再調査しても、無駄骨だ。署長も、自殺だと断言したじゃないか。例のタレコミは、よくあるいたずらだ。気にするな」

沢富は、伊達を説得するつもりはなかったが、当時の彼女に自殺する要因がないことだけは話しておきたかった。「確かに、彼女は、天真爛漫で聡明なJKで、恨みをかうような少女じゃありませんでした。お母さんの話では、友達関係で悩むようなことはなく、勉強だけでなく、部長として部活でも頑張っていたそうです。それどころか、F大生のメル友ができてからは、一層明るくなったとおっしゃっていました。

クラスメイトたちともよく会話していたようで、なにかに悩んで落ち込んでいた様子はまったく見受けられなかったと彼女たちは声を揃えて言っていました。いったい、どこに自殺の要因があるというんでしょうか？校長は、皇室コースの厳しい規則を苦にして自殺したのではないかとおっしゃってましたが、それは、学校にも管理責任がある事を示したにすぎません。このような、明るくて活発な少女が、うつ病になるのでしょうか？突然、投身自殺をするのでしょうか？僕には、どうしても、自殺とは思えないのです」

伊達は、沢富の意見にも一理あると思い、腕組みをして大きくなずいた。「まあ、サワの言わんとすることはわかる。でもな～、すでに、自殺として処理されたんだ。しかも、署長が断言したわけだし。いまさら、自殺じゃなくて、殺害の可能性がありますなんて、署長に、言えないんじゃないのか。そんなこと言ったら、俺たち、アバシりに飛ばされるんじゃないか？俺は、署長の判断に従うべきだと思うがな」

「そうですか、そうですよね。署長が、自殺と判断したわけですから、我々は、従うのが筋ってものです。だから、先輩には、見て見ぬふりをしていてほしいのです。先輩には、決して迷惑をおかけしません。僕を見逃してください。お願いします」沢富は、頭を下げた。伊達の顔は引きつってしまった。一緒に死ぬとまで言っておきながら、突き放すような言い方をしたことに恥ずかしくなった。

「おい、おい、見逃すとか見逃さないとか、そんな他人行儀なことを言うな。俺たちは、一蓮托生（いちれんたくしょう）じゃないか。俺が言いたいことは、たとえ殺害だったとしても、犯人を割り出すための手掛かりがまったくないんじゃないか、ということだ。生徒たちに聞き込みをしたところで、いったいどんなことがわかるというんだ。すでに、クラスメイトたちは、事情聴取されているんだぞ。これ以上、どんなことを聞きだそうというんだ。たとえだ、目撃者がいたとしても、その人物を探し出すのは容易なことではないと思うがな」

沢富は、伊達の前向きな意見を聞いて笑顔がこぼれた。目を輝かせた沢富は、自分の考えをもう少し述べることにした。「先輩、まったく、手がかりがないというわけじゃないのです。彼女は、午後6時ごろ5階にある放送室の西側窓から転落しました。もし、彼女が突き落とされたのであれば、その時刻に部外者がいたはずなのです。おそらく、校長の来客がいたはず。その来客が犯人に違いありません」

腕組みをした伊達は、何度もうなずいていた。だが、その仮説には、具体的証拠となる事実は何一つなかった。単なる憶測では、校長を追い詰めることはできないと思えた。もし仮に、その時刻に校長の来客の事実が判明したとしても、その来客が犯人と特定するに値する証拠を発見することは不可能に近いと思えた。というのは、おそらく、共犯者である校長は、来客のアリバイ工作も準備していたと考えられたからだ。つまり、校長と殺し屋の二人が共謀して彼女を殺害したのならば、完全犯罪が成立するように思えた。

天井を見上げた伊達は、大きなため息をついて答えた。「まあ、サワの言ってることが事実だったとしても、そのことを立証することは不可能じゃないか。なんせ、校長が主犯格ということだからな。殺し屋が彼女を突き落としているところを目撃した生徒がいたならば、多少は、校長を追い詰めることができないこともないが、おそらく、目撃者はいないだろう。まあ、たとえいたとしても、自分の身の危険を考えれば、目撃証言はできないということだ。

本当に、校長が主犯格だったならば、マジ、ヤバイぞ。サワ、もう、これ以上事件に首を突っ込まない方が賢明だ。下手をすると、サワも、暗殺されかねないぞ。サワの正義感は、よ〜〜く、分かる。でもな、時には、目をつぶらなきゃいかんときがある。それが、大人というものだ。彼女のことを思えば、無念だが、ここはグツと気持ちを抑えて、署長の指示に従ったらどうだ。俺は、それが賢明だと思うがな。ナオ子は、どう思う？」

ナオ子も同感であったが、沢富の性格からして、暗殺を恐れて、いったん決意した気持ちを変えろとは思えなかった。沢富の気持ちに反対しても、おそらく、単独で、事件解決に乗り出すと思えた。「でも、あなた、サワちゃんが言うように、神父でもあり教育者でもある校長が主犯格だったら、神様だって、仏様だって、私だって、許さないわよ。彼女は、絶対、成仏できないわ。誰かが敵（かたき）を討ってあげないと、かわいそうじゃない。ここは、一度、校長に探りを入れるべきじゃない。何かボロを出すような気がするんだけど」

意外な返事をしたナオ子に伊達は、目を丸くした。ナオ子はことの恐ろしさがよく分かっていないと思った。伊達は、二人を説得することにした。「おい、お前までも、サワの暗殺説に同調するのか？だからだな～～、仮にだ、よ～～～く聞け、校長が主犯格であったという事実をつかんだとしても、俺たちには、どうすることもできない、と言ってるんだ。マジ、ヘタをすると、俺たちまでも、暗殺されかねないんだぞ。少女を暗殺するぐらいだ。国家を甘く見てたら、一瞬にして、闇に葬られてしまう」

沢富は、ケネディー大統領暗殺事件のことを思い出していた。事件にかかわった多くの人たちが、不審な死を遂げていた。それは、おそらく、国家犯罪を隠ぺいするためのCIAの仕業だと思った。そのことを考えれば、国家犯罪にかかわる事件に首を突っ込めば、十中八九、暗殺されることは間違いないと思った。このままだと、夫妻までも暗殺されかねない。これだけは避けなければならないと思った。

大きくうなずいた沢富は、伊達に賛同する意見を述べることにした。「先輩の言われる通りです。僕たちには、真実を把握できたとしても、どうすることもできません。仮に、校長が主犯格だと訴えたならば、きっと、僕は暗殺されるでしょう。僕は、やはりバカでした。もうこれ以上、この事件に首を突っ込むのはやめます。ご夫妻には、ご迷惑をおかけいたしました」

伊達は、沢富がようやくわかってくれたと思い、ホッとしたのか笑顔でナオ子にふり見た。だが、眉間に皺を寄せたナオ子は、沢富の本心を見抜いていた。きっと、単独行動に出る。そして、いずれそのことが国家に知れ、暗殺されると思った。ナオ子は、何らかの方法で彼女の無念を晴らしてあげたかった。また、沢富が暗殺されたなら、夫が署長になる夢は泡となって消え去ると思った。

「そうよ、こんな国家がかかわった気味の悪い事件に、刑事は首を突っ込まない方がいいわ。二人とも、おとなしく、署長の指示に従うべきよ。でも、なんとなく、校長は、少しにおうわね。ちょっとだけ、探りを入れてみようかしら。私だったら、怪しまれないと思うの。こう見えても、高校時代は、新聞部の部長だったのよ。青少年育成委員会の代表として、校長に会ってみるわ。これだったら、誰も文句は言えないでしょ」伊達と沢富は、目が点になってしまった。

## 助っ人

6月15日（木）、朝食の後片付けがひと段落すると、キッチンテーブルの椅子に腰かけたナオ子は、今後の調査のことを考えた。昨日は、勢い余って名探偵気取りをしてしまったが、いざ実行に移すとなると、なんとなく、心細くなってきた。沢富の暗殺説では、校長が主犯格となっていたが、一度、面会したぐらいで校長が犯人であるかどうかは分からないことは言うまでもなかった。悪いことをするような人物かどうかは、なんとなく、直感的に分かるような気がしたが、確固たる証拠をつかまない限り、校長に天誅（てんちゅう）をくわえることができないことに気分が落ち込み始めた。

このまま落ち込んでいたのでは、闘う前から負けてしまうと思った。気を取り直したナオ子は、塩をまく前のお相撲さんのように両手でホッペタをバシバシと叩き気合を入れた。そして、名門ナカス女学院の取材という名目で校長との面会依頼の電話をすることにした。電話に出た受付嬢の返事では、今回は、スケジュールがいっぱいで面会できないとの返事だった。事件後、校長はすべての取材を断っているように思えた。

このまま引き下がっては、二度と面会できないように思えたナオ子は、世界的に有名なバツテン真理教の神父でもある校長の紹介と歴史あるナカス女学院の栄光を全国に知らしめたい、とおべんちゃらを並べて、必死に面会のアポがとれるまで食い下がった。約30分間の押し問答の末、青少年育成委員会のインタビューということで、どうにか6月21日（水）午後3時に10分間の面会のアポを取ることができた。

歯が浮くようなお世辞を並べて面会の約束を取り付けたものの今一つ気持ちがスッキリしなかった。というのも、夫がいうように、校長が犯人であっても上層部の指示で刑事は手も足も出せないということ、さらに、警察が校長を護衛しているという不可解な不条理に納得がいかなかったからだ。仮に、校長が本当に犯人だったとして、なにか、校長に天誅をくわえるいい方法はないかと考えてみた。しばらく目をつぶって考えてみたが、名案はまったく浮かんでこなかった。

ナオ子は、自分の行動にやるせないものを感じた。いったい、自分は何をやりたいのだろうかという疑問を持った。彼女の無念を晴らしてあげたい一心で、校長との対決の面会をしようと意気込んでいるが、こんなことをしても、彼女の冥福を祈ることになるのだろうかと思った。単なる独りよがりようで、むなしくなってしまった。それかといって、彼女が暗殺された可能性があるにもかかわらず、事実を確かめず、このまま泣き寝入りをするのもしゃくだった。

当然、まず、校長が殺害にかかわっていたかどうかを確かめることが先決だが、本当に、校長が殺害にかかわっていたことが分かった場合、どうやって、彼女の敵を取ればいいのか？そのことを考えれば考えるほど、ますます自分の無力さを感じ、落ち込んでしまった。昨夜から、彼女の亡霊が、助けて、助けて、とナオ子に助けを求める声が何度も頭の中を駆け巡り、事実を確かめなければ、いつまでたっても、彼女は成仏できないように思えた。

まだ、彼女の暗殺が判明したわけではなかったが、ナオ子の頭の中に助けを求める彼女の亡霊が現れるようになって、彼女の殺害が事実のようになってしまっていた。じっと考え続けていると暗闇の中に引きずり込まれていくような恐怖感に襲われ、全身に震えが起き始めた。その時、脳裏に能天気なひろ子の笑顔が浮かび上がった。現実に戻されたナオ子は、急にひろ子に会いたくなった。そうだ、ひろ子さんに会えば、ないかいいヒントが得られるかも知れない、そう思った時、スマホのひろ子の名前をタッチしていた。

非番のひろ子はシャワーを浴びていた。リビングのテーブルの上に置いていたスマホから“かもめはかもめ”の着メロが鳴った。こんな時にと思ったが、花柄のバスタオルをつかみ取ると乳房をブルブルンさせながら、リビングにかけて行った。ナオ子の名前を見て、今ごろなんだろうと思ったが、即座に通話をタッチした。ハイと返事するとナオ子の甲高い声が耳に突き刺さった。「今、お工作中？ちょっといいかしら？」ひろ子は、張りを失い始めたお尻をバスタオルでふきながら答えた。「ハ～～、なにか？」

ナオ子は、とにかくすぐにでも会いたい一心で、昼食の誘いをすることにした。「ちょっと、ひろ子さんに聞いてほしい話があるの。お昼、ご一緒しない。お仕事で、ダメかしら？」よりによってシャワーの最中に、ランチの誘いとは、と思っはみだが、非番でヒマしていたときの渡りに船と思い、軽やかな声で返事した。「はい、今日は、非番でヒマしてたんです。ナオ子さんにお会いしたいと思っていたところなんです」

ひろ子が、適当に喜んでみせると、パツと笑顔を作ったナオ子は、話を続けた。「そう、よかったわ。お家にいらして。楽天ポイントをためて、松阪牛のロースを買ったのよ。待ってるわね」ひろ子は松坂牛と聞いて、よだれが出そうになった。このような高級な牛肉を一度は食べてみたいと思っていた。「え、松阪牛ですか。最高級じゃないですか。まだ、食べたことがないんです。はい、お昼前に伺います」こんなに落ち込んでいる時に、今朝、タイミングよく松阪牛のロースが届き、しかも、ひろ子とランチできるとは、神様のお導きではないかと両手を合わせて感謝した。

ひろ子は、12時前にマンションに到着した。すでにステーキの準備はできていた。テーブルについたひろ子は、初めて目の前で見ると松阪牛に釘付けになった。「これが松阪牛ですね。何か、食べるのがもったいないような気がしますね。こんな、芸術的な霜降り、初めて見ました。まさに食べる芸術品ですね。見るだけでも、目の保養になりますね」ナオ子も結婚記念日ぐらいしか食べられなかった。

「ひろ子さん、さあ、いただきます。レアが最高よ」大きなフライパンに牛脂を溶かし、スライスニンニクを敷くとローズ一切れを入れた。強火で1分焼いて、一回ひっくり返すの。そして、弱火で30秒。ポン酢でいただくと最高。ひろ子さん、どうぞ」ナオ子は、ひろ子のさらにステーキを乗せた。目を輝かせたひろ子は、喜色満面で香水のような甘い香りをスツ〜と吸い込んだ。「なんて、いい香り。あ〜、幸せ。生きててよかった」

ナオ子は、大げさな表現に笑いが込み上げてきた。「そう、言っていただくとうれしいわ。さあ、召し上がれ」ひろ子は、ナイフを肉の上に置くとナイフの重みですつと切れた。「こんなの、初めて。すごく、やわらかいんですね」一口頬張り、やわらかい歯ごたえを感じると、甘い肉汁が口いっぱいに広がって行った。「こんなの、生まれて初めて。こんなに美味しいお肉が、この世にあるんですね。もう、いつ死んでもいいって感じ。最高」

ナオ子は、笑いをこらえるのに必死だった。100グラム8000円と言ったら、気絶するじゃないかと思い、値段は言わないことにした。早速もう一枚を焼くとナオ子もお肉を口に押し込んだ。去年の誕生日祝いにもらったワイングラスに赤ワインを注ぎ、ひろ子に差し出した。「どうぞ、この赤ワインも楽天で買ったの」ひろ子は、楽天のことが知りたくなった。「ナオ子さん、楽天って、そんなにいいんですか？」ナオ子は、楽天ポイントのことを話すことにした。「いいって、というか、楽天ポイントが、すごくたまるのよ。だから、ポイントをためて、年に一度、6月に松阪牛を注文するってわけ」

ひろ子は、すでにクレジットカードを2枚持っていたが、今持っているカードにはそれほどポイントはたまらなかった。「そうですか。そんなにたまるんだったら、私も、楽天にしようかな〜。あ、そう、お話があるって、おっしゃってましたよね」ひろ子の笑顔を見ていると、ナオ子は、すっかり例の話をするのを忘れていた。「そうなのよ。聞いてくださる？ちょっと、暗い話なんだけど」

いまさら暗いとか言われても、聞かないとは言えない状況を作られては、頷く以外なかった。「私でよかったら、どうぞ」ナオ子は、即座に暗殺説を話すのも楽しい食事が台無しになるようで、まずは、6月2日に起きた事件の話から始めることにした。「ほら、月初めに、ナカス女学院のJKが自殺したってニュース知ってる？」ひろ子は、ワインを口に含んだままうなずいた。そして、グイット流し込むと返事した。「あの事件ね。超名門女子高のJKがウツで投身自殺したって事件でしょ。育ちがいい財閥のお嬢さんは、田舎育ちの貧乏女子とは、違うんでしょう。かわいそうな気もするけど」

ナオ子は、しばらく時間をおいて、話を続けた。「思うんだけど、財閥のJKって、ウツになって自殺するのかしら。ほら、お母さんが言ってたじゃない。とっても明るくて、活発な子でした。自殺するなんて、考えられないって。どうも、その言葉が気になってね」ひろ子は、目を見開きワイングラスを置くとナオ子を見つめた。「え、ナオ子さん、あれは、自殺じゃないって、いたいんですか？」

ナオ子もワイングラスを置くとひろ子を見つめ、真剣な眼差しで答えた。「そう、きっと、自殺じゃないと思う」その言葉が耳に飛び込むと、即座に詮索好きのよからぬ虫が、ひろ子の心の底から這いあがってきた。「まさか、それじゃ、他殺ってこと。いったい誰が？なんのために？」ひろ子は、遠くを見つめるような眼差しで、つぶやいた。ナオ子は、ひろ子が食いついてくれたことに内心ホッとした。さらに、ナオ子は、他殺をにおわせる発言をした。「明るくて活発な女子が、自殺、ってのは、ちょっと変じゃない。女の直感なんだけど」

ひろ子は、グイグイ、JK自殺事件の謎に引き込まれていった。「でも、警察は、自殺って、公表してたでしょ。万が一、殺害だったら、大変なことになるんじゃない。でも、マジ殺害だったら、生徒が犯人ということ？まさか。それはないな～、人気者でみんなに好かれていたようだし。それじゃ、いったい誰？センコウ？」ナオ子は、暗殺説を話してもいい頃合いじゃないかと思った。

「ひろ子さん、仮に殺害だったとしたら、犯人は、誰だと思う。私も、生徒じゃないような気がするの。犯人の可能性があるのは、誰かしら？」ナオ子は、ひろ子の好奇心をあおるような質問をした。ひろ子の頭の中は、事件のことでいっぱいになった。まだ、松阪牛は、半分も残っていたが、完全に食欲は消え去っていた。しばらく考えていたひろ子だったが、ふと我に返り、松阪牛に目をやった。

「やっぱ、殺害ってことはないでしょ。警察も自殺って公表してるし。私たちが、勘ぐっても、しょうがないわけだし」ひろ子は、おなかがすいているのを思い出したように、お肉を食べ始めた。ひろ子は、どんな質問も聞き入れないというように、一心不乱に口を動かしていた。「そうよね、食事がまずくなっちゃったわね。ごめんなさい。マンゴーゼリーのデザートもあるのよ」

食事を終わるとナオ子は、デザートのマンゴーゼリーを小皿に載せて運んできた。「これも楽天で買ったの。大半は、楽天で賄うの。とにかく、ポイントがガバガバ付くから、かなりお得。ひろ子さんも、楽天に加入するといいわよ。びっくりするぐらいポイントがたまるから。ポイントは、ネットショッピングに使えるだけでなく、Eddyにもチャージできて、とにかくお得よ。そう、時々、ポイントを使って、“くら寿司”に主人と食べに行くのよ。もう一つカードを作るなら、楽天にしなさいよ。チョ～～おすすめ」

ひろ子もそこまでお得と言われると早速楽天カードを作りたくなってきた。「そんなにお得ですか。セゾンとYJの2枚持っているんだけど、楽天も早速作ります。ところで、JK自殺事件の話なんですが、その事件にご主人がかかわっていらっしゃるんですか？何か、新事実でも出てきたとか？」この事件に関しては、警察とは無関係に個人的な興味から調査しようと思っていたため、沢富の名前を出すまいと思っていたが、暗殺説の出どころは沢富だったため、暗殺説の出どころぐらいは話しても差し支えないような気がした。

「まあ、自殺に疑いを持ったのは、主人じゃなくて、サワちゃんなのよ。サワちゃんが、自殺は変っていうものだから、ちょっと気になってね。それで、ひろ子さんの考えを聞いてみたってわけ。来週の水曜日に校長に会うことになってるの。どんな方か一度見たくて。ちょっと出しゃばったことするようだけど、どうしても、校長の顔をこの目で確かめたかったの。その時、亡くなった彼女が、校長が犯人かどうか教えてくれるんじゃないかと思えてね」

ひろ子は沢富と聞いて、先ほどのJK自殺事件への興味が再燃してしまった。「へ～～、サワちゃんがね。確かに、誰が考えても、明るくて人気者のJKが自殺するって、変よね。ナオ子さん、校長とお会いになるんですか。私もあってみたいな～。かの有名なバッテン真理教の神父でもある校長ですよ。興味あるワ～～」ナオ子は、ひろ子を広報担当という名目で同行させた方が、インタビューがやりやすいように思えてきた。「ひろ子さん、ご一緒しませんか？二人の目で見た方が、校長の本性が見えてくるような気がするの。どう？」

ひろ子は、突然、目を輝かせて、返事した。「え、ご一緒していいんですか。ぜひ、お願いします。何時から面会されますか？」ナオ子も目を輝かせて、返事した。「ひろ子さんが、同行してくれたら、鬼に金棒ね。面会時間は、6月21日、水曜、午後3時から」ひろ子は、頷き、探偵気分のバロメーターがグングン上り始めた。「分かりました。それじゃ、2時にナオ子さんをお迎えに参ります。何か、ワクワクしてきた」

ナオ子は、この面会で、何か手掛かりがつかめそうに思えた。とにかく、校長に面会するだけでも、彼女の冥福になると思えた。たとえ敵は取れなくとも、睨み付けることぐらいはできるような気がした。「美人のひろ子さんが、インタビューしたら、校長はベラベラしゃべるんじゃないかしら。きっと、ポロを出すわ」ひろ子は、校長との面会が決まると、校長のアリバイについて知りたくなった。

「ナオ子さん、例のJKですが、放送室の窓から転落したんですよね。仮に、彼女が転落した時刻に、校長が放送室にいたならば、校長が犯人ってことも考えられます。校長は、その時刻、どこにいたと言っていますか？」ナオ子は、校長に関する詳しい情報を持っていなかった。「校長に関することは、まったく知らないのよ。主人もサワちゃんもこの事件に関しては、単なる自殺事件ということで、何も知らされてないみたい。ニュースでは、彼女が放送部員だったことから、5階にある放送室の西側窓から転落した可能性が高いと言っていたわ。それと、転落現場を目撃した人は、一人もいないと言っていたわね」

ひろ子は、左手を頬に当て、首をかしげてじっと考え込んだ。しばらくして、首を持ち上げると話を続けた。「殺害をにおわせる手がかりはまったくないということですよ。警察も、自殺と断定するのは、無理ありません。事件解決の突破口は、校長のアリバイのような気がします。転落事故が起きたと思われる6月2日午後6時前後に、校長はどこにいたか？きっと、放送室にいたに違いないわ。でも、誰も目撃していないのよね。悔しいわ」

ナオ子も校長が臭いと思っていたが、警察は校長を護衛しているようで、自殺の判断は覆りそうにはなかった。「そうね、校長が“私が殺しました”なんて自白するわけないし、きっと、このまま自殺事件で処理されるわね。彼女は、成仏できないわね。とにかく、二人で、やるだけのことはやってみましょうよ。それが、彼女の冥福を祈ることになると思うの」二人は、見つめ合い、頷いた。

## 色仕掛け

6月21日（水）、午後2時45分、赤のスイフトスポーツが校門を通過すると来客用のパーキングに停車した。ピンクのスーツを着たひろ子とベージュのスーツを着たナオ子は、ロイヤルホテルのような豪華なロビーの奥にある受付に向かった。校長とのアポを受付嬢に伝えるとロビーでしばらく待機するように指示された。午後2時55分、30才前後のショートボブの受付嬢は、エレベータで2階の校長室に二人を案内した。

受付嬢が校長室のドアを2回ノックすると部屋の中から中年男性の甘い声の返事が、「ハイ、どうぞ」と返ってきた。二人が中に入り深々とお辞儀をすると50歳前後に見えるイケメンの優しそうな校長が笑顔で軽くお辞儀をした。二人は、威厳のある60歳前後の男性が現れると思っていたため、ちょっと面食らってしまった。実物は、写真よりはるかに若々しく見えた。部屋の中央のブラウンのソファに案内され、二人が腰かけるとひろ子の正面に腰かけた校長は笑顔で挨拶した。「校長の小松です。ようこそいらっしゃいました。時間は、短いですが、どんなことでもお答えいたします」

短い時間を有効に使うために、早速、ナオ子は口火を切った。「早速ですが、校長の女子教育におけるポリシーをお聞かせください」校長は、待ってました、と言わんばかりにドヤ顔で胸を張って話し始めた。

「ナカスアカデミーは、バツテン真理教を母体とする歴史ある国際的に有名な名門アカデミースクールです。ナカスアカデミーは、幼稚園から大学院まで、バツテン真理教の教えに従って、世界に誇れる女子教育に取り組んでおります。多くの世界の皇室に気品ある優秀な卒業生を送り続け、いまや、世界の皇室から、絶大なる信頼を勝ち得ております。また、国際的に評価される気品と知性に富んだ女子を育成するために、ナカスアカデミーオリジナルの教育カリキュラムを採用しております。

語学科目においては、英語を必須科目とし、フランス語、ドイツ語、スペイン語を選択科目といたしております。

理数科目においては、AIを必須科目とし、プログラミング、数学、物理、化学、生物を選択科目としております。

社会科目においては、倫理学を必須科目とし、歴史、地理、文学、法学、経済学を選択科目としております。

礼儀作法科目においては、日本文化の象徴と言える茶道を必須科目とし、生花、着付けを選択科目としております。

芸能科目においては、日本舞踊を必須科目とし、クラシックバレエ、ベリーダンス、フラダンス、新体操を選択科目としております。

音楽科目においては、声楽を必須科目とし、琴、三味線、和太鼓、バイオリン、ピアノを選択科目としております。

神学科目においては、バプテン真理教を必須科目とし、仏教、イスラム教、キリスト教を選択科目としております。

特に、「皇室コース」と「シスターコース」においては、貞操堅守をモットーとし、処女であることを誇りに思う思想教育を日々行っております。入学時の身体検査においても、処女膜検査を行い、処女であることを合格の条件といたしております。入学後も、毎月処女膜検査を行い、処女であることの誇りを自覚させております。また、卒業証書には、処女証明書を添付しております。

ナオ子は録音しながら真剣な眼差しで聞き入っていたが、この調子で校長の独演を聞かされていたならば、転落事故当日のことが聞き出せなくなってしまうのではないかと不安になってきた。風貌は、決して悪人の様相をしてないが、温厚に見える紳士ほど曲者がいると直感していた。転落事故にかかわる質問のきっかけがほしかったが、校長は独演をやめる気配が見られなかった。



ひろ子も徐々に校長の話を聞いているといらだってきた。処女という言葉を知るときに、非処女をバカにしているように思えてならなかった。突然、ひろ子が質問の声を発した。「校長、ちょっと質問、よろしいですか？」話を中断された校長は、突然の質問に不愉快な表情を見せた。ひろ子を睨み付けた校長は返事した。「なんですか？」ひろ子は即座に質問した。「処女を失った生徒には、なにか処罰でもあるのですか？」

校長は、さらに不愉快な表情を作って答えた。「規則には、処罰というものはありません。ただ、処女膜を失っても、懺悔（ざんげ）が神に認められればいいのです。本人の反省次第では、処女膜再生手術を認めております」間髪入れずに、質問を続けた。「万が一、反省の色が見られない場合はどうなるんですか？」校長は、まったく、意味のない質問をするレポーターと言わんばかりに、唇をひん曲げて返事した。「反省の色が見られない場合は、退学ということになりますが、ご心配なく、創立以来、規則に違反した生徒は一人も出ておりません」校長は、ゴホンと咳払いをした。

ひろ子は、よくもこんな非人道的な学校に生徒が集まるものだと思わなかった。時間は、あっという間に過ぎ去り、インタビューの残り時間は1分を切っていた。このままでは、転落事故の解明につながる質問ができずに帰らなければならなくなっていた。二人は、焦っていた。壁時計の針が10分を指したのを見た瞬間、ひろ子は絶体絶命と思い、とっさに左膝を大きく持ち上げ、脚を組んだ。その時、股間の奥でピカッと輝く赤のショーツが校長の目に飛び込んだ。

突然、校長はニッコと笑顔を作った。インタビューは10分間の約束だったが、水晶がちりばめられた赤のショーツが気にいったのか、話が途切れるどころかますます自慢話のような独演を続けた。ナオ子とひろ子は、お互い見つめ合って、笑顔でうなずき合った。ナオ子は真剣に聞き入っているふりをしながら転落事故に関する質問を切り出すタイミングを狙っていた。こうなったら野となれ山となれ、と開き直った。

「校長、ナカスアカデミーの素晴らしさは、十分聞かせていただきました。校長のお話は録音しておりますので、次回の青少年育成白書に超名門高等学校紹介のコラムを設けて、校長のお話を掲載させていただきます」ナオ子は、まったくのどたがりをマジな顔つきで言っただけ。そして、即座に、事件に関する質問をした。「ところで校長、自殺事件のことは、お気の毒でした。ナカス女学院の汚点となってしまい、残念に思われていらっしゃるのでしょうか？」

校長は、自殺事件に関するインタビューはすべて断っていたが、ピカッと輝く赤のショーツの効き目があったのか、校長は自殺事件について話し始めた。「まことに遺憾です。このような不祥事は、二度とあってはいけません。でも、彼女にも大きな悩みがあり、思い余って、自殺に及んだことでしょう。心からご冥福をお祈ります。ご父母には、なんとってお詫び申し上げてよいか言葉がありません。当校にも責任はるわけで、今後このような悲しい事件が起きないように、生徒たちの気持ちを大切に、教職員一同、教育改善に努めてまいりたい所存です」

話が掲載されると聞いて、あらん限りの弁解をグダグダと校長は述べた。ナオ子は、転落事故が起きた時刻に校長はどこにいたかカメラをかけて確認することにした。「ところで、転落事故のあった日は、来客の方と校長室でお会いになっていたそうですが、訃報を聞かれて、驚かれたでしょう」一瞬、校長の顔色が変わった。校長は、貝のように口を閉ざし、鋭いナイフのような眼差しでナオ子を睨み付けた。来客のことを知っていたことに、警戒心が起きた様子であった。

ナオ子は、一瞬、しまったと思った。いまだ公開していない来客の話をしたことに校長は怒りを覚えたようだった。このままだと校長を取り逃がしてしまうと焦った。その時、ひろ子が、股間の奥がしっかり見えるように股を開きながら右ひざをゆっくり大きく回しながら足を組み替えた。校長は、我を忘れて、身を乗り出して、股間を覗き込んでしまった。ナオ子の視線を感じた校長は、我に返り、気まずそうに頭をかきながらアリバイを話し始めた。

「いや、まあ、全く驚きました。その日は、来客がありまして、翌日、転落事故を知らされたときは、心臓が止まる思いでした」顔をひきつらせた校長は、ハハハ・・・とナオ子に愛そう笑いをした。来客があったことを校長の口から聞き出したナオ子は、来客の推測は当たっていたと確信した。ひろ子とうなずき合ったナオ子は、正体がばれないうちに逃げることにした。

「あ、いけません。時間をこんなにオーバーしてしまいました。貴重なお時間を拝借いたしました。このたびは、ありがとうございます。必ず、校長のご期待にお応えできる記事を掲載いたします。それでは、失礼いたします」ナオ子がスッと立ち上がると、ひろ子も後に続きスッと立ち上がった。校長に怪しまれては一大事と校長室を出るとエレベーターを使わず、駆け足で階段を下りて行った。二人は、爆弾を仕掛けたビルから脱出するかのようには玄関を飛び出した。二人を救出したスイスポは、爆音を立てて校門を飛び出していった。

## AIのささやき

どうにか事件の手掛かりをつかんだナオ子は、今夜夫と沢富に報告することになっていた。ひろ子も同席したいと申し出たので、今夜7時に4人で夕食をすることにした。伊達と沢富は、今夜の報告が待ち遠しかった。沢富は、事件当日に来客があったことを聞き出すことに成功していることを願っていた。伊達は、校長を怒らせるような質問をやらかしていなければいいかと内心ハラハラしていた。

ひろ子は、6時過ぎにはやってきて、夕食の準備を手伝っていた。夕食は、楽天で購入した松阪牛のすき焼きだった。テーブルには、牛肉、卵、野菜、こんにゃく、シイタケ、などが並べられていた。ナオ子とひろ子は、二人が帰宅するまで今日の成果について話し合うことにした。ナオ子が校長のアリバイについて話し始めた。「転落事故が起きた時刻、校長は来客と校長室にいたと言ったけど、これは怪しいわね。きっと嘘だわ」

ひろ子も同感だった。「きっと、嘘。紳士面して、謝罪じみたことを言っていたけど、犯人は、校長と来客よ。窓から彼女を放り投げたのは、来客ね。でも、なんの証拠もないのよね。単なる憶測でしかないし。どうにかして、敵を討ちたいわ」ひろ子は、愚痴をこぼした。突然、ナオ子の顔色が変わった。「ところで、もう二人の正体、ばれてるかしら？」ナオ子は、夕食の準備中そのことがずっと気になっていた。万が一ばれて、暗殺されないかと不安になってきた。

ナオ子は、ひろ子の顔を見つめると、一度うなずき、ニコッと笑顔を作った。「あの校長、やっぱ、神父なのね。初めてだったんじゃない。あそこを生で見るの。食い入るように覗き込んでいたじゃない。この事実がある限り、こっちも弱みを握ったってことよ。たとえ正体がばれたとしても、手は出さないでしょう。ひろ子さんの色気で、命拾いしたってわけね」ナオ子はクスクスと笑い声をあげた。突然マジな顔つきになったひろ子は、ナオ子をグイッと見つめ釘を刺した。「サワちゃんには、内緒」ひろ子は、人差し指を立てて唇に押し当てた。

ちょうどその時、伊達と沢富が帰ってきた。「おい、帰ったぞ」沢富は、ひろ子のブラウンの靴を見て、久しぶりに会えると思い、笑顔がこぼれた。伊達と沢富がキッチンに入ってくるとさっと立ち上がったひろ子は、「お邪魔してます」と笑顔で挨拶した。ナオ子は、しかめっ面で愚痴をこぼした。「あなた、遅いわよ。今日は、例の件、報告するって、言ってたでしょ。もう～、食事にしましょ。松阪牛のすき焼きよ。年に一度の贅沢なのよ。お腹すいちゃった。サワちゃんも、さあ、席について」伊達はナオ子の正面に、沢富はひろ子の正面に腰かけた。

伊達は、ちょっと気まずそうに腰かけた。沢富は、ペコペコ頭を上下させながら腰かけた。伊達が、松阪牛に見入り、驚嘆の声を発した。「これは、うまそうだな～。松阪牛か、これ食って、ショック死、しなけりゃいいが」伊達はワハハと大きな笑い声をあげた。沢富は子供のころはよく松阪牛を食べていたが、刑事になってからは食べる機会がなかった。「霜降りの松阪牛ですか。最高級の牛肉ですよ。すき焼きは、僕の好物なんです。何年ぶりだろう、松阪牛。今日は、本当にラッキーだな」

沢富の笑顔を見たナオ子は、沢富を冷やかした。「ラッキーなのは、ひろ子さんに会えたからでしょ。いつになったら、仲人ができるのかしら。待ち遠しいわ」ひろ子は、顔を真っ赤にして、立ち上がった。「ビール持ってきます」ナオ子も立ち上がり、ナオ子は瓶ビールを、ひろ子はグラスを運んできた。「さあ、どうぞ、」ナオ子は伊達に、ひろ子は沢富にビールを注いだ。お互いビールを注ぎ合ったところで、伊達が乾杯の音頭を取った。

このたびは、校長へのインタビューお疲れさまでした。また、沢富とひろ子さんの未来を祝して、カンパ〜〜〜イ。カチン、カチンとグラスのキスが終わると、ナオ子がひろ子に声をかけた。「ひろ子さん、早く、赤ちゃん産んでよ。赤ちゃんの子守をしたいのよ。待ち遠しいわ〜〜」沢富とひろ子の顔が真っ赤になった。伊達が即座に話を続けた。「赤ちゃんほしいよな。ナオ子、お前こそ、早く産めよ。俺は、頑張ってるんだから。コウノトリは、何やってるんだ」

コウノトリと聞いて、ひろ子がクスクスと笑った。「赤ちゃんは、神様からの贈り物です。果報は、寝て待てというじゃないですか」ナオ子が、少しがっかりした表情で食事を勧めた。「さあ、いただきます。松阪牛よ。神様に感謝して、いただきます。こういうご馳走をいただけるのも、主人のおかげなのよね。感謝しなくっちゃね」ナオ子は、伊達をチラッと見つめた。

伊達は、人前で感謝してもらったことがうれしかったと見えて、ニッコと笑顔を作った。そして、インタビューの話のあとで昇格の朗報を話すことにした。「おい、どうだった。インタビュー」ナオ子は、急に、ドヤ顔を作り、胸を張った。「やったわよ。にらんだとおり、校長は、ホンボシね。転落事故の時刻。来客と校長室で面会してたのよ。アリバイ工作のつもりで、口を滑らしたのよ。やはり、校長と来客が、犯人ってことじゃない」

伊達は腕組みをしてじっと考え込んだ。大きくなずき、言葉を発した。「そうか、来客があったか。もしかすると、もしかだな～～。サワが言うように、暗殺説が正しいのかもしれない。でもな～～、確固たる証拠は、ないしな～～。校長が自白しない限り、自殺として処理される。悔しいが、俺たちでは、手も足も出ない。泣き寝入りするしかない。サワどう思う？」

沢富は、来客の事実が分かる前から暗殺説を確信していた。JK殺害事件は、警察までも巻き込んだ国家首謀の陰謀であり、九州独立運動弾圧のための暗殺事件だとにらんでいた。一刑事では、どうにもならないことは、重々承知していた。今でも、刑事をやめる覚悟で告発したい気持ちだった。「僕は、校長が主犯格だとにらんでいます。でも、警察までもバックにつけた校長を、ヒラの刑事ではどうすることもできません。いや、校長だって、暗殺される可能性はあるのです。国家とは、そういう恐ろしいものです。先輩が言うように、泣き寝入りするしかありません。本当に、彼女が気の毒でなりません」

ひろ子も沢富の意見に同感だった。「私も、校長が怪しいと思います。でも、なんの証拠もありません。憶測だけで、校長を犯人扱いできません。彼女は本当に不運だったと思います。こんなことが二度とあってはいけないと思いますが、第二の暗殺が起きないとも限りません。校長に不運が起きなければいいのですが」話に耳を傾けていたナオ子は、肩を落とし悲しそうな声で話し始めた。

「まったく、この世は、神も仏もないのね。彼女は、成仏できずに、いつまでも、学校をさまようわよ。結局は、警察も、国家のイヌね。でも、サワちゃん、むちゃをしないでね。まだ、これからなんだから。人生なんて、不条理の地獄をさまようようなものなのよ。がっかりして、東京に帰るなんて言わないでよ。ひろ子さん、サワちゃんをしっかりと捕まえていてちょうだい。油断したら、男って、糸の切れた凧みたいに、フラフラって、飛んでいくんだから。いい」

暗い話を断ち切るように伊達が、朗報を話すことにした。「湿っぽい話ばかりしてちゃ、せつかくの松阪牛がまずくなる。聞いて、びっくりするな、ナオ子。ついに俺もやったぞ。俺は、警部になった。サワは、警部補だ」ナオ子は、え〜〜、と悲鳴を上げた。「あなた、マジ、ついに奇跡が起きたわ。嘘じゃないわよね。署長目前じゃない。やっぱ、持つものは、優秀な部下ってことね。サワちゃんのおかげね。サワちゃん、松阪牛、主人の分も食べていいわよ」

ひろ子も目を丸くして驚いて見せた。「おめでとうございます。伊達警部ですか。カッコいいですね」伊達はちょっと照れくさそうに頭をかいた。沢富もうれしかったが、JKの転落死を思うと気が晴れなかった。「先輩は、やるときはやるんですよ。ちゃんと上は、見てるってことです。先輩、おめでとうございます。次は、署長ですね」伊達は、なぜ警部になれたかを知らず、ワハハと能天気には笑っていた。

翌日、ひろ子は、AIタクシー内で“夏をあきらめて”を鼻の孔を膨らませて歌っていた。転落死したJKのことを考えると、あまりにもかわいそうで、歌でも歌っていないと涙があふれ出そうだった。その時、チャットちゃんだったら、この事件、どう解決できるか、試したくなった。「チャットちゃんでも、無理だとは思いますが。ちょっと、質問していい？」チャットちゃんは、人間レベル扱いされたことに、ムカツと来た。

「ヒロピン、ちょっと、失礼じゃありませんか？無理とは何ですか？チャットちゃんに不可能という文字はありません。どんな問題ですか？」ひろ子は、チャットちゃんにもプライドってものがあると知り、少し驚いた。「あら、不可能という文字はないの？どんなに優秀なAIでも、不可能というものはあると思うんだけど。それじゃいい、質問するわよ。ある人物のアリバイ崩しの問題。その人物は、校長室にいたと言いました。このアリバイを崩す方法は？」

チャットちゃんは、一瞬にして、一つの方法を発見した。「二つの質問に答えていただければ、回答できます」ひろ子は、たったこれだけの言葉から、回答が出せるとは、意外だった。「え、本当。信じられない。二つの質問って？」チャットちゃんは、自信ありげに話し始めた。「でも、この方法は警察では禁じられている方法ですから、極秘です。いいですね。それでは、質問します。その校長は携帯電話を身に着けていましたか？その携帯電話の電話番号はわかりますか？電話番号をインプットしていただければ、指定された時刻の携帯電話の所在地を特定できます」

ひろ子は、信じられなかったが、ナオ子から校長の携帯番号を聞かされていた。「分かるけど。電話番号は、09049496741だけど。たったそれだけでわかるの？マジ？」チャットちゃんは、知りたい日時を質問した。「それでは、知りたい日時はいつですか？」ひろ子は、即座に答えた。「6月2日、金曜日、午後6時前後」チャットちゃんは、即座に宇宙ステーションと交信し、指定日時の携帯電話の所在地を受信した。

「分かりました。その時刻における携帯電話の所在地は、ナカス女学院高校、西棟5階の放送室です。以上」ひろ子は、愕然とした。携帯電話が独り歩きしない限り、犯人は、間違いなく校長ということになる。「チャットちゃん、マジ、この答えは、正しいの？こんなことが、どうしてわかるのよ？ヤマカンじゃないでしょうね？」チャットちゃんは、即座に答えた。「ヤマカンは、人間が行うものでAIには存在しません。すべての答えは、人間が与えたプログラムを使って導き出します。プログラムに問題なければ、正解です」

ひろ子は、恐ろしくなった。「でも、GPSを使えば、所在地が分かるのは知ってるけど、電話番号だけで、判明できるなんて、それって、違法じゃない？」チャットちゃんは即座に返答した。「先ほど言ったように、違法です。だから、警察では、この方法は使えません。だから、極秘と念を押したのです」ひろ子は、チャットちゃんが、嘘をつくはずがないから、この答えは本当だと信じた。ひろ子は、チャットちゃんに感謝すると同時にチャットちゃんのプログラマーって宇宙人じゃないかと思った。

6月27日（火）、ナカス女学院の小松校長は、バットン真理教テキサス支部での演説を行うために、アラスカ経由ダラス着のエアーパームビーチ・モーレンシルツ1977便で福岡空港を出立した。だが、その飛行機は、突如、アラスカ上空でレーダーから消えた。ただ、NASAの報告によれば、アラスカ上空で未確認飛行物体（UFO）が、一瞬、レーダーで確認されたとのことだった。